

原著論文

日本統治下における理蕃政策と蕃人野球チーム「能高団」

林 勝 龍*

**Governor-General of Taiwan's Aborigine Policy and Aborigine
Baseball Team “Nokodan” in Taiwan under Japanese Rule**

Sheng-Lung Lin

Abstract

Taiwan became the first Japanese colony in 1895. At that time, there were three main ethnic groups in Taiwan, namely Japanese, Chinese (Han) and aborigines. Governor-General of Taiwan regarded Chinese as a more civilized group while aborigines as savages, rebellious and uncivilized group. In early periods, Governor-General of Taiwan suppressed the aborigines by armed force in one hand, and simultaneously implemented Aborigine Policy in dimensions of education, production, medication and tourism. The so called Aborigine Policy also implies the meaning of Japanization policy. According to Fujii(1989), resource exploitation was the primary purpose of Governor-General of Taiwan thus “Aborigine Policy” was established to draw forestry resources from Taiwan reasonably.

The main purpose of this research is to find how Governor-General of Taiwan implemented Aborigine Policy to aborigines by way of baseball. In early period of Japanese governing, the aborigines in Taiwan were regarded as a savage and uncivilized group. However, the negative stereotype on the aborigines started to change after the special civilized-group “Nokodan” baseball team went fighting in west Taiwan and visited Japan. Conclusions are as follows:

1. Eguchi promoted Aborigine Policy for long time and modified the image of the aborigines in Taiwan from negative to positive.
2. While competing with Japanese team in Taiwan and Japan, “Nokodan” baseball team made audiences feel that the aborigines were gradually civilized.
3. “Nokodan” baseball team seemed like a moving showcase for the success of Aborigine Policy. In competitions, they displayed Japanese manner like politeness and humbleness which they had learned from the School of Agriculture in Hualien Harbor.

Key words :Taiwan baseball, Aborigines in Taiwan, Aborigine policy

キーワード：台湾野球，台湾原住民，理蕃政策

* 早稲田大学スポーツ科学研究科博士課程

はじめに

本研究は、日本統治下の台湾において、台湾総督府（以下・総督府）が台湾原住民に対し展開した理蕃政策と野球の関わりについて論じるものである。理蕃政策とは台湾原住民に対して、総督府の取った宥和政策である。はじめ総督府は原住民に対し武力で統治したが、激しい抵抗にあったため、日本人化する平和的な政策に転じた。これが本研究で扱う理蕃政策である。

（台湾の歴史と原住民文化）

台湾の歴史は四百年前から語られることが多い。そもそも、台湾は長期に渡って中国大陸の文化圏外にあり、その位置づけが明確になったのは、17世紀後半の明の遺臣鄭成功（1624 - 1662）によってであった。鄭は台湾を東アジア貿易の拠点としていたオランダ人を駆逐し、結果として台湾を清政権の直轄領とし、それによって福建、広東から多くの中国人が台湾に移住するようになった。冒頭で四百年の歴史的背景と言ったのは、こうした経緯を踏まえてのことである。しかし、当然のことながら、台湾の先住民は、非漢原住民であった。彼らはオランダに占領される以前には、彼らのみで形成していた社会の中で暮らしていたのである。

台湾の原住民とは、台湾島とその周りの島々に古くから住み着いていた人々を指している。しかし日本統治下においては人類学的な立場から、タイヤル、サイシャット、ブヌン、ツォウ、ルカイ、パイワン、プユマ（パナパナヤン）、アミ（パングツァハ）、ヤミの九族に分類された。文化的には各族の言語は全てオーストロネシア語族に属している。そして、原住民は焼畑耕作、狩猟活動、アニミズム的観念、ここに由来する首狩りなどの独特な風習を残していた。これらの行為は古いマレー文化の特徴であった¹。

17世紀より、オランダ、スペイン、明、清、日本、中華民国の支配を受ける中で、様々な文化が台湾

に伝わってきたが、中でも日本の影響が大きかった。1895年の下関条約によって清朝が日本に台湾を割譲して以来、日本は総督府を置き原住民を支配する政策を展開した。総督府から見ると、原住民は野蛮で貧しく、反抗的であった。そこで総督府は初期の武断統治を改め、殖産、医療、教育、観光などの方法による「理蕃政策」に力を入れた。

日本の植民地になってからも原住民は固有の文化を保持しようとした。しかしこれらの行為は「野蛮」という理由で総督府に禁じられた。例えば、首狩りは禁止され、頭目（原住民社会の首領）の権力は弱められ、狩猟や祭り、呪術的行為は制限されたのである。

他方、少数民族である原住民は清朝期より漢民族との「生存の競争」に敗北し、奥地への移動を余儀なくされた。すなわち大部分の原住民は台湾全島の総面積の44%を占めている中央山脈以東に住み込んだのである²。その後、台湾が日本の植民地となってからは、総督府は山地にある大量の山林資源に目をつけ、その山地資源を取得するべく様々な原住民居住地開発の政策を実施していたのである。

（理蕃政策としての観光）

総督府によって殖産、医療、教育、観光などの理蕃政策が実施されてきたが、その中でも啓蒙的観光という理蕃政策（以下・理蕃観光³）が最も効果が得られたと指摘されている⁴。1897年以来総督府は理蕃観光を実施していった⁵。理蕃観光とは、「内地観光」（写真1）と「島内観光」に分けられるが、宗主国の威信誇示及び啓蒙という目的で行われた。植民地初期に原住民による抵抗運動が頻繁に起こった際に、総督府は先ず「威信誇示観光」を実施した。これは、長らく山野に暮らしていた原住民の頭を集め、内地（日本本土）の観光を行い、軍事施設や演習を中心に見学させるものであった。頭目にこうした差をみせつけることによって、軍事力では内地に対抗できないことを自覚させ、さらに、部落に帰って、見学した感想を部落の人達に伝えることを総督府が意図した



写真1. 1912年台湾原住民の内地観光（於東京）
（2008年『近代日本の植民地博覧会』より転載）

ものであった。

昭和初期には、総督府は「威信誇示観光」の効果がすでにあったとして、「啓発観光」へと徐々に転換していった。このように頭目を中心とする観光から、学生、青年団を中心とする内地における「啓発観光」が実施されることになったのである。「啓発観光」では軍事施設の見学がなくなり、農村や農業組織の見学が中心に行われた。原住民に宗主国の「文明」を見せ、彼らの文明を開化させようとするものであった。

（展示された台湾原住民）

1851年、ロンドンにおいて初めての万国博覧会が開催された。伊藤真実子（2008）は、万国博覧会を「第一に国家間の技術競争、第二に消費と娯楽、第三に帝国の支配を正当化する文化装置、ディスプレイである。⁶」と規定している。

日本は1862年のロンドン万国博覧会に参加し、1877年には第一回内国勸業博覧会を開催してい

る。その後、台湾領有後の1903年の第五回日本内国勸業博覧会の開催に際しては、植民地台湾からの展示物が求められた。会場には日本の植民地主義を表象した台湾館が設置された。こうした設営の仕方は内地人に異民族を理解させるためであった。同時にそれは学術人類館として会場外に設営され、同じ人類館内ではアイヌ、台湾原住民、清国人、韓国人、琉球人などの異民族が展示されていた。また、会場の付近には各民族の伝統的な家が建てられ、博覧会期間中に彼らはこの家屋に寝泊りしていた。すなわち、台湾原住民は「観光」の対象となり、野蛮、未開な生活のイメージを内地人に伝えるとともに、逆に日本帝国のアジアを席卷しているとする優秀性を示す誇示的意図があったと考えられる。その後、博覧会においては日本帝国版図内の異民族（写真2）が次々と登場した。まさに伊藤が語るように、台湾原住民は、性のシンボル、消費・娯楽の対象として日本帝国の国力誇示の機能を果たしていたといえるだろう。

（先行研究の検討と問題の所在）

日本が台湾統治を始めた当初、まず、平野地に住む漢民族の統治に着手し、その統治が一応の達成を見ると、次に山地に住む原住民への統治が開始された。しかし、原住民統治は武力行使によって行われたもので、原住民からの激しい抵抗



写真2. 1913年明治記念拓殖博覧会に参集した植民地の各民
（2008年『近代日本の植民地博覧会』より転載）

にあうと、それまでの武力政策をやめ、平和的に原住民を撫育する政策に転じた。この政策転換は1907年の「理蕃五年計画」を以って始まっている。

これまでの日本統治下台湾における理蕃政策についての先行研究では、林素珍(2003)『日治後期的理蕃—傀儡與愚民的教化政策(1930—1945)⁷』のほか、藤井志津枝による次の研究がある。

『日據前期臺灣總督府的理蕃政策⁸』(1986),『日據時期臺灣總督府的理蕃政策(1895—1915)⁹』(1989),『理蕃¹⁰』(1997),『臺灣原住民史政策篇(三)日治時期¹¹』(2001)。

理蕃政策の目的は原住民居住地域の豊かな資源を獲得することであり、具体的には原住民への近代的な農耕法・授産法・児童教育・医療・樟脳など山林殖産の教授として展開されたことがこれらの先行研究で明らかにされている。しかし、本論文で扱う野球は考察の対象外に置かれていた。

日本統治下台湾における野球の歴史研究については蔡宗信(1992)『日據時代台湾棒球運動發展過程之研究—以1895(明治28)年至1926(大正15)年為中心—¹²』,謝佳芬(2005)『台湾棒球運動之研究(1920—1945)¹³』,湯川充雄(1932)『台湾野球史¹⁴』などがあるが、いずれも理蕃政策については言及していない。

東台湾研究会¹⁵が発行している『東台湾研究』第17編(1925年・台北市)に「蕃人チーム能高団」の記事があり、その中で能高団チーム結成の経緯について、当時の花蓮港庁長であった江口良三郎が、これを理蕃政策から説明した部分があったにもかかわらずである。さらに、江口によれば、野球により原住民のイメージを改善しようとした様子がうかがえる。本研究はこの記事を出発点としている。

先行研究の検討から本研究は、野球による理蕃政策の展開を再構成し、理蕃政策として展開した野球がどのように原住民イメージを変容させたかを明らかにすることを目的とする。

(用語の説明)

日本統治下では、台湾原住民は「生蕃」、「蕃人」

「高砂族」などと呼ばれていた。本稿で史料を直接引用する場合は「生蕃」など「」付きで用いるが、それ以外は原住民と記す。原住民は2005年に制定された原住民族基本法第二条に基づく台湾先住民に対する公称である。

本研究の対象とする原住民野球チーム、「能高団」の選手は何れもが花蓮の東部海岸の平地に住むアミ族を指すものである。

当時の原住民については、宮本延人によれば、漢民族が属する「普通行政区民」と原住民が属する「特別行政区民」に分けられていたが、アミ族は原住民ながら、その漢民族化の程度の高さにより、漢民族と同じ「普通行政区民」の扱いを受けていた¹⁶。なお文献史料に出る「蕃地」とは原住民居住地、「蕃害」とは原住民の抵抗運動を意味している。

1. 台湾原住民研究と台湾野球

1-1: 日本の人類学発展と台湾原住民

1877年、日本における組織的な人類学研究はモース(Edward Sylvester Morse)の大森貝塚発掘から始まったと言われている。しかし、日本が本格的に人類学研究を開始したのは1884年の人類学会の設立からであった¹⁷。約10年後、朝鮮の甲午農民戦争(東学党の乱)を契機とした日清戦争がはじまり、清国の敗退によって日本帝国ははじめて植民地台湾を得たのであるが、人類学の分野では、これによって山地原住民と平地漢民族を対象とする大きな研究舞台を得たのであった。

さらに、1896年以来東京帝国大学は台湾原住民研究のために人類学者である鳥居龍蔵を台湾に派遣し、第1回の台湾調査を皮切りに、その後台湾原住民調査、研究などを展開するようになった。彼の台湾調査の報告書「人類学研究・台湾の原住民(一)序論」(1910年)の中で「文明にまったく背を向けた未開で残忍な多数の原住民族が住みついている¹⁸」(下線・筆者)と語っている。すなわち、「文明」と「未開」という対立図式化がなされているのである¹⁹。

そもそも台湾における先住民族はオーストロネシア系民族であったが、1862年から83年にかけての鄭氏の時代に大陸から漢族が移住したことで二分化する。ひとつは主として西部と北部の平地に居住した者達で、渡来した漢族に融和、同化していった。彼らは清朝によって「熟蕃」と呼ばれ、のちに「平埔族」と呼ばれた。それに対し、山岳地帯に居住し、漢族への同化を拒み、独自の文化をもちつづけようとした先住民は「生蕃」と呼ばれた²⁰。

そして、日本の植民地となってから、総督府は用字を「番」から「蕃」と改めた。鳥居は従来「生蕃」、「熟蕃」といった分別法を1896年から1900年にわたって計4回の台湾調査報告に基づいて原住民を「タイヤルあるいは文身蕃」、「新高」、「ブヌン」、「サウ」、「ツァリセン」、「パイワン」、「ピウマ、あるいは卑南族[ピラム]」、「阿眉[アミ]」、「ヤミ、あるいはグルグル・セラ」と分類し（以上が「生蕃に該当」）、さらに「平埔族」（「熟蕃」に該当）を加え、それによって計10種の分類がなされた。これらの原住民族の分類法は総督府に採用されなかったが、その後、台湾に来る人類学者に大きな影響を与えたと言われている²¹。

1923年、摂政宮皇太子（故昭和天皇）は台湾に行啓したが、皇太子は台湾原住民を引見する際に、「蕃族」、「蕃人」などの言葉使いが相応しくないと述べ、「高砂族」と呼ぶべきだと主張した。しかし、実際に「蕃族」、「蕃人」から正式に「高砂族」と呼ばれるのは1935年「始政40周年」の時からであった。

1-2. 日本から台湾への野球の伝播

明治初期のベースボールは、折からの富国強兵を国是とする国家的要請に対応すべく日本の伝統的な武道精神と合体し、精神修養が求められる野球となった。典型的な代表の事例として野球は第一高等学校野球部によって展開されていった。こうした精神修養を旨とする野球は、明治期に広く日本で行われていた²²。

1895年、台湾が日本の植民地となってからも、

日本で精神野球の薫陶を受けた人たちが、そうした日本精神を植民地台湾に根付かせるために、台湾にやってきた。しかし、当時の台湾は日本が実施しようとした近代スポーツとは何かすらの知識も持たなかったため、植民地初期の台湾野球は日本が考えた一方的な植民地政策の表われであったと言える。

1906年3月に台湾で最初に野球チームを組織したのは台湾総督府国語学校中学校であった。同年、中学校に続き、台湾総督府国語師範部および夜学校台北中学会が野球チームを結成した。ここに台北に三つの野球チームがそろう、これら三校が台湾野球の発信地となった。

その後、1915年1月、北部野球協会が発足し、その影響を受けて、同年9月、南部野球協会、翌年台中体育会が組織され、台湾の北部、中部、南部の各地を統轄する団体がそろう、台湾の野球はより一層活発に活動できるようになった。また、1920年には台湾体育協会が組織され、これによって台湾と日本のスポーツ交流が組織制度上可能となった²³。

2. 野球と原住民

2-1. 原住民野球チームの結成

1899年に生まれた花蓮出身の漢民族林桂興（写真3）は花蓮商工在学中に野球を経験した。そして、1920年に花蓮商工を卒業し、花蓮旭組に入社した。彼は会社の野球部にも携わっていた。林は野球に対する知識と技術を理解していたのである²⁴。

1921年、林は舞鶴社アミ族少年らが、小石を投げたり、小石を木棒に当てて、小石を目的とする地点まで飛ばしたりしているのを見て、それが野球のような動きであったことに興味を引かれた²⁵。その中の一人サウマ²⁶という少年は小石でもって、迅速、かつ正確にこれを投げ込んでいるのを見て、林はこの驚異的な身体能力に注目し、アミ族少年たちからなる台湾野球史上初めての「原住民野球チーム」を結成することを発案した。林

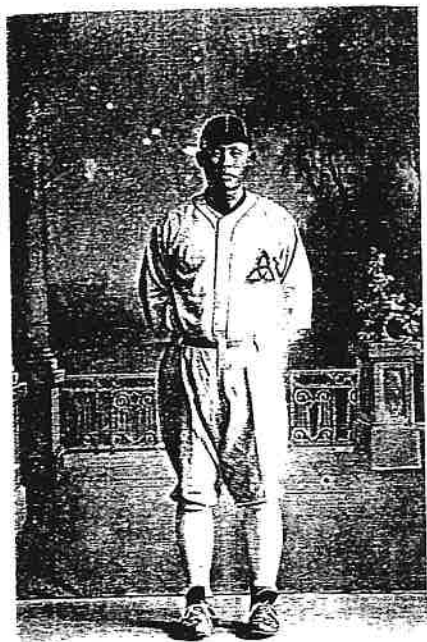


写真3. 林桂興（1994年『旭日の東昇』より転載）

は自ら監督としてこのチームを指導した。その後チームは、地方大会で活躍するようになった。かつて総督府警務局理蕃課長を経験し、1920年9月に花蓮港庁長として赴任した江口良三郎は、この「原住民野球チーム」に興味を持ち、3において詳述するように、野球を通して理蕃政策を実現するべく、1923年にメンバー全員を花蓮港農業補習学校（以下・花農）に入学させ、チームを「能高団」と命名した。

2-2. 花蓮の野球発展

「化外の地」と呼ばれる東部は花蓮と台東の地区に分かれ、いずれも娯楽に乏しい地域であった。1917年、野球は台湾の東部に伝わったが、実際に、花蓮において野球が盛んになったのは1922年に花蓮港体育協会（以下・花蓮体協）が組織されたからのことであったと考えられる。

当時花蓮港庁長であった江口良三郎は花蓮体協会長に就任し、副会長に梅野清太を選任した。

花蓮体協は「花蓮港在住内地人有力者全部を會員に網羅して基礎強固なものであったが、後日に至り財團法人臺灣體育協會花蓮港支部に変更され今日に及んでいる。²⁷」とあるように独自の運営

方針を打ち上げていた。江口と梅野は特に野球に興味を持ち、盛んに野球を奨励した結果、「鐵團」（花蓮港鉄道部）をはじめ、「廳團」（花蓮港庁）、「鹽糖」（鹽水港製糖会社花蓮港製糖所）、「商工」（花蓮商工）などの強力なチームが現れるようになった。これらのチームは花蓮に唯一の花岡岩グラウンドにおいて試合を行い、競い合うことで花蓮野球は盛況を呈するようになった。

その後、江口会長の肝いりにより原住民はこの野球技を知るに及んだ結果、その関心度はいやがうえにも高まって行った。このことによって、江口は理蕃だけではなく、花蓮体協に携わることで、花蓮港の体育や野球の普及に力を入れたことをさらに強化していった。

1920年代には花蓮港の野球は一つの娯楽として発展してきたが、休日毎に花岡岩グラウンドにおいて野球試合を行うと、「婦人も子供も老人も青年も、官吏も商人も会社員も、内地人本島人（漢民族・筆者注）も蕃人も唯だ一家族の如くになつていと楽しく見物してゐる。²⁸」そして、野球をする人と野球を見る人々の間は相互に融和していった。そこには西部のような関係者への攻撃の罵声もなく、その上に入場料の問題も話題とならなかった²⁹。

このように江口は野球によって内地人、漢民族、原住民が共有する空間を作り上げることに成功するが、そこには内台融和の意図がうかがえる。

2-3. アミ族社会

アミ族は台湾東部（図1）の海岸山脈の周辺に住居し、南北に細長く分布し、1920年代には人口42,028人を有し、九族の中で人口が最も多かった³⁰。アミ族は焼畑農耕で生計を営む住民であり、狩猟、海川での漁労などを副業として生計を立てていたが、生業を担当する人は、海や川から捕獲した魚類、貝類を海岸や川辺の空き地に置くのが普通であった。地面に置かれた捕獲物は常に鳥の捕食ターゲットとなり、アミ族・年らは鳥に獲物が取られないように、小石を用いて鳥を撃退することが日課となり、それゆえ、野球に適す

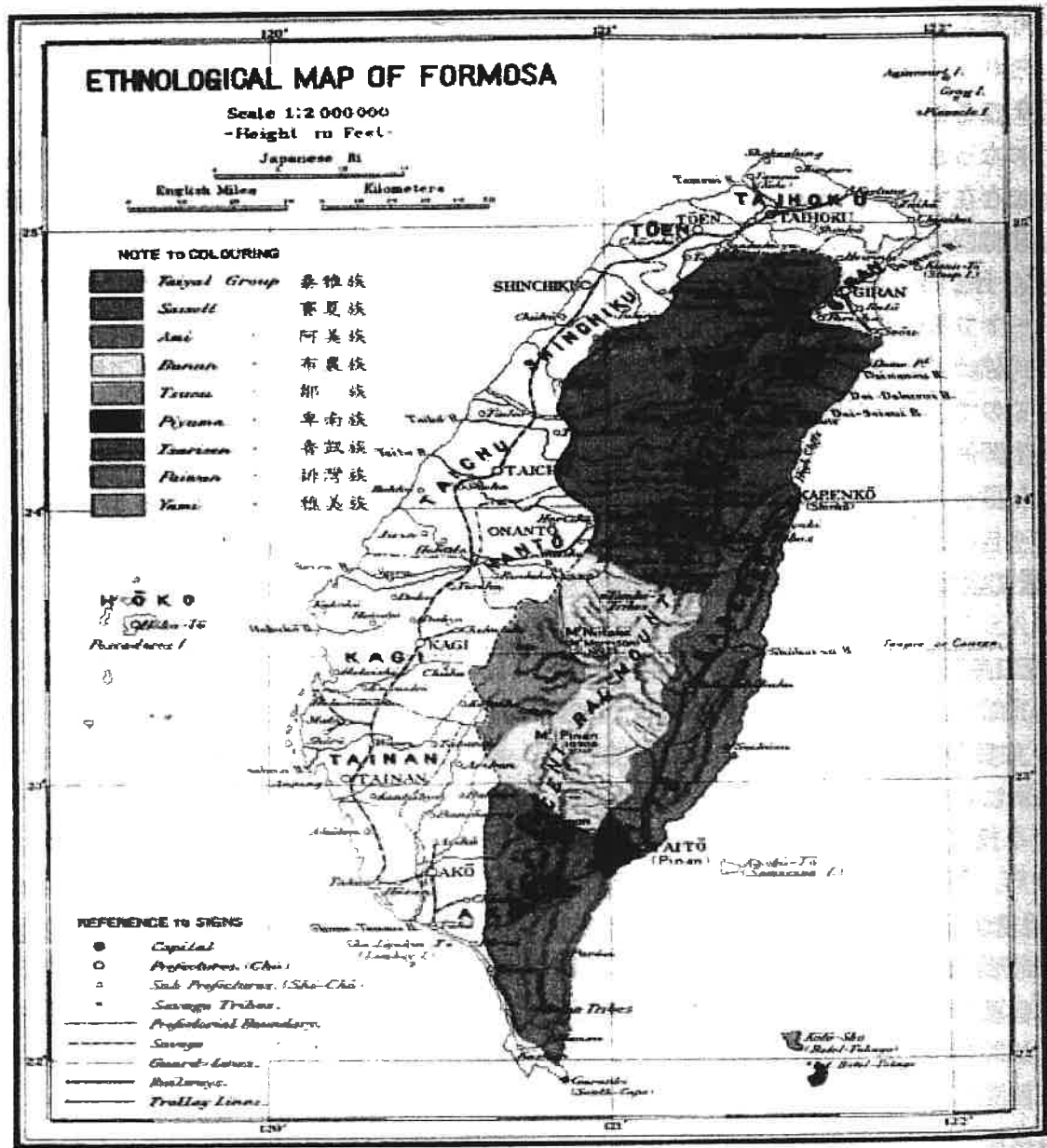


図1. 台湾原住民分布図 (1997年『理蕃』より転載)

る制球力，強肩などが極めて自然に身につけていたと考えられる³¹。

元来，アミ族の社会的特徴としては母系的親族組織，男子年齢階梯組織（以下・年齢組織）と首長制などが複合的に組み合わさった社会であるとされる。本研究では，アミ族が日本野球を受け入れる素地にあったと考えられる男子年齢階梯組織³²に注目したい。

この年齢組織とは，中核に生産性の高い「12, 13歳の少年から，60歳前後の老人までが所属することを義務づけられているもので，通常パカロガイ (pa-karong-ay 12, 13歳～15, 16歳)，カッ

パー (kaph 17, 18歳～42, 43歳)，マトアサイ (ma-to, as-ay 44, 45歳～61, 62歳) に大別」³³された。また，地方によって年齢層の区別が違っており，この年齢組織的な概念で各年齢層の間に社会的ルール，すなわち倫理的なシステムを形成させ，年長者が若者にアミ族社会の規範，生業などの方法を指導，教育することが義務化された。

したがって，各年齢層の間には明確な上下関係が作られ，年長者は若者に種族的慣習による社会ルールを仕付ける事が不可欠となった。若者は年長者を尊敬し，服従しなければならなかった。こ

のような年齢組織によってアミ族社会の基盤が形成され、それが「敬老習俗」となっていった。さらに社会的な各活動もこの基盤に基づいて展開されるようになった³⁴。こうした在り方は日本社会に伝統的に存在する上下関係、また、日本野球にみる先輩後輩関係を思わせる。

2010年9月2日、筆者は大学時代の野球部のチームメイトである郭勇志（アミ族）へのインタビューで、郭は「私はアミ族の年齢階梯組織を理解しているので、野球部に入部後、野球部に要求される上下関係の環境にすぐに溶け込むことができた³⁵」と語っている。

3. 野球による文明教化の理蕃政策

3-1. 江口良三郎の人物像

江口良三郎（写真4）は1869年11月24日（1869-1926）佐賀県佐賀郡鍋島村に生まれ、1895年7月に陸軍に属し、台湾に渡った。その後、警察界に身を投じ、台北州警部、宜蘭支庁長を経て、1904年、警務課次席警部から宜蘭庁警務課長に昇進した。1910年、総督府蕃務本署に入って、1913年総督府警視に任命され、高等官七等に叙せられた。その後、1915年には警務局理蕃課長となり、1920年9月、台湾自治制創始³⁶にあたって、花蓮港庁下全面積の76%を占める「蕃地」の蕃務行政に腕を発揮できる人物として、江口が第5代花蓮港庁長（任期、1920年-1926年）に



写真4. 江口良三郎（1920年『臺法会報』より転載）

抜擢された³⁷。

3-2. 江口の原住民理解

江口は理蕃上の功績により花蓮港の庁長まで昇進したのであるが、江口の長年にわたる理蕃行政への従事が原住民に如何に理解されたのかを、次に考察する。

警務局理蕃課長時代の江口は理蕃政策方針として「理蕃政策、の真髄は蕃人の了解にある。乃ち蕃族の存在を認むるにある³⁸」（下線・筆者）と述べている。つまり、江口は原住民を正しく理解し、また、その存在を認めることが大切であると、こうした理念に基づいて理蕃政策を展開することが何よりも不可欠であるとした。

また、「蕃地」の資源開発にあたって江口は「近時蕃界開発の宣傳を見るや盛んなるも未だ蕃人理解の聲を聞かざるは遺憾千萬である³⁹」と従来の総督府の蕃地開発政策への批判を吐露している。すなわち江口は原住民の立場に立って原住民のことを考え、その上で理蕃政策を展開した人物であると考えられるのである。

さらに、江口自身は理蕃事業上の難しさを「理蕃三難」と表現しているが、「理蕃三難」とは、「一、天候の異常。二、地勢の峻険。三、兇蕃の決死反抗⁴⁰」としている。特に原住民の決死的反抗についての大要は次のようである。

歴史的に見れば、蕃地経営を図ってきたオランダ、スペイン、鄭成功、そして清国など何れもが原住民の決死的反抗によって植民地化は失敗している。先住民は正史こそ持たないが、先祖によって残されている伝説を信じ、また、それを民族の矜持として、自己所有の土地を開拓し、社廟を建てたりして、その遺習を守ることが祖霊に対する礼であると信じていたのである。

すなわち「一社には一部族の共有する獵地漁場があつて区域截然、敢えて相侵するを許さない⁴¹」、「若し他社他部族の侵すあらば敢然蹶起して武力解決に訴へる⁴²」などと説明している。

そして江口は原住民の性情、首狩りについて次のように述べている。「彼等は古来武を尚び、勇

を好む祖先の血を享けたる上に幼時より家庭の教養と郷黨（郷里を同じくする仲間・筆者注）の訓練とに由つて身體は強健に膽氣（度胸，胆力・筆者注）は粗豪に乃ち喜べは人たるも怒れば獸たるの慍悍（荒々しく強いこと・筆者注）なる性格を成し来つたのである。然も鹹首（首狩り・筆者注）の風習は彼等の武勇の表彰として尊ばれ今日に至るも未だ全く其跡を絶たない⁴³，「鹹首はたゞ彼等の武勇を表し祖先の靈を慰むるにあるので首を狩るにしても彼の土匪の如く惨虐なる暴行は加へない。丁度我国の戦國時代に於ける武士の意氣そのまゝで⁴⁴」ある。

世の中に宣伝される原住民の首狩りといった極めて残虐な風習と見られがちな行為も、江口は原住民を原住民たらしめる尚武精神という原住民特有の文化として理解しており、むしろ、その祖靈信仰を尊んでいるように思われる。

さらに、江口は言葉を継いで「然も彼等はそれに依つて俸祿の増加も願はなければ領土擴張の野心もない。その真情たるや至つて高潔である。かるが故にこの至純の心情と壯重なる武勇を保養して道徳的文化に導けば國防上の見地から觀察するも意義深遠なるものがある⁴⁵」（下線・筆者）と述べている。このように原住民は領土擴張の野心も持たずに自分が営んでいる土地や物を先祖から授つたものとして大切にし、先祖からの習慣を堅く守っているのに対し、総督府は彼らを原住民居住地開発のために山へ追いやったと言い得る。したがって、そうした方針は原住民との衝突をもたらさざるを得なかった。これは江口が言った「蕃人理解の聲を聞かざる」と「蕃人の了解」，「蕃族の存在」を認めないことが原因してのことと考えられる。

さらに、江口は日本人と原住民の価値観の相違について、次のようにまとめている。

原住民も人である以上は大陸本土にいる中国人も人種の相違のある日本人も、本質的な差異は一見してそれが存在するように見えるが、その一見しただけの差異が、様々な不和を生む。そして結果としてそこから火薬の臭氣のたちこめる弾雨が

生じ、血なまぐさは骨が枯れるまでつづき、この中で、孤独を託つ思いが芽生えるのであるが、その原因となっているものは全て不和がもたらす空疎な空間から生ずるものである。

しかし、そうした空間を意識することなく価値観の相異を無視して、支配者の価値観を押し付けようとするのは、支配者政府の官僚であり、一方ではそうした価値観の相異を主張して、自己認知（アイデンティティー）を訴えるのは人民である。すなわち官僚は人民の希求であるアイデンティティーを無視し伝統的な禁忌を破り、人民がそれを見、それを感じて悲嘆にくれるのを横目にみて、むしろそれをよいこととして人民の目を盗み瞞着を重ね、自己の欲望のままに婦女を犯し、金品を貪って、平然としている。このように人民の希求に目をそむけるために、衝突が起こるのであるが、このような状況は、かつてオランダ、スペイン、しかも清国も同様であった。それを考えると日本の台湾統治後の政策はこれらと同じであってはならないのである⁴⁶。

3-3. 蕃人野球チーム「能高団」の誕生

アミ族少年から編成された原住民野球チームは花蓮野球大会での活躍によって、花蓮港官員の目を奪った。とくに花蓮港庁長江口は、この「原住民野球チーム」に興味を持ち、野球を用いて、如何にして、原住民を文明教化できるかを考え始めた。

江口は梅野清太（花蓮港街長兼任）と討議した結果、1923年9月、原住民野球チーム全員を花農⁴⁷に入学させ、同月20日、「能高団⁴⁸」と称する野球チームを創設した。翌21日、「能高団」の発会式を挙げて、野球練習に取りかかった。

アミ族少年らは花農に入学後、授業を聴く傍ら、野球練習に励んでいった。これらの選手は特待生として入学したわけではなかった。彼等は登校する前に一時間ばかり労働し、放課後もまた労働する。このように働いても月に僅か3円から6円しか得られない。稼いだお金は食費や学費に費やされた。ただお米だけは実家から取り寄せ、それで

どうか学校の合宿所内の生活がまかなわれた。彼らは「正真正銘の苦学生⁴⁹」と呼ばれていた。

江口はもともと花蓮港庁団の主将であった門馬経祐の手腕を見込んで、彼を「能高団」監督に就任させた。そこで門馬は監督として正式に「能高団」を指導し始めた。それ以来、雨が降らない限り、週3回を花岡岩グラウンドに於いて門馬監督の指導にしたがって猛練習を重ねていったのである⁵⁰。

江口は「能高団」を結成する際に以下のように述べている。

「蓋し蕃人は幼の頃から小鳥を獲る為に小石を投ずるの風習に慣らされてゐる。だから、野球技に於てその投球の正確なるは殆ど先天的ともいつても過言ではない。加ふるに走壘にかけては全く隼の如く、その敏捷なる動作は時に内地人選手の企及し能はぬ所があるばかりでなく、體力の強健な點に於て、バッティングの利く點に於て、これを適當に訓練誘導するならば、凡そ野球技に必要なとすべき要素を彼等は先天的に十分に具備している⁵¹」。

3-4. 「能高団」結成の目的

江口は如何なる目的で「能高団」を作り上げようとしたのか。同チームが結成されるに際し、江口は次のように述べている。「蕃人に對する一般的野蠻觀が直ちに臺灣を實際以上の非文明なものにして了つてゐた觀があり、且つ吾々の理蕃政策乃至撫蕃事業が、しも世間に理解されずにゐた事



写真5. 台湾原住民を野蠻觀視する最初の絵は日本の雑誌に載った(1896年『風俗画報』より転載)

は頗る遺憾であつた。(中略)彼等の教化程度を知らしめるには野球の如きものこそ一番手近な早道であらうと信じ⁵²」た。

台湾の原住民に対する「野蠻觀⁵³」(写真5)と目されるのは、台湾=非文明と言った短路的な結びつけによるものであった。

そして、江口は「彼等が傳統的に持つて生まれた凶暴性の血を矯めると共に他面スポーツの真精神を彼等に體得せしめ、併せて對外的に臺灣に於ける蕃人教化の實質を廣く世の中に知らせたい微意に外ならぬのである⁵⁴」と述べる。暴力的な原住民をルールにしたがう野球競技へ参加させることによって、遵法精神を習得させることが図られたのである。

江口は「況んや皇化に浴し、教育を受け、文明の環境に接觸してゐる彼等としては野球は愚か將來は撞球もやれば飛行機にも乗り、或は彼等の中から大科學家、大政治家が生まれぬとも限らぬ。バットを振つて熱球を飛ばす位のことには猿が人語を解かすよりも遙かに容易なことに間違ひない⁵⁵」と述べる。これはただ文明の風を彼らが遅れて伝授されただけであり、皇民化を受けることで原住民は永遠に原住民ではなく、文明化への進化が期待されるとするものであった。

しかしながら、「猿が人語を解かすより」といった輕蔑用語を用いて江口自身は日本人=文明人、原住民=野蠻人とするが、こうした江口の発言は日本人の優越感が本音として表われたものと考えられよう。

最後に江口は「將來は単に一花蓮港や臺灣のみを相手とせず、有力なる後援を得て、廣く内地遠征の途に乗り出し、一つには彼等の内地觀光、他面には蕃人宣傳の意味に於て、是非共このチームをしてそこまで漕ぎつけさせたいと思つてゐる次第である⁵⁶」と述べている。

かつて1903年、第5回日本内国勸業博覧会の時に一個の商品として消費された台湾原住民の野蠻、未開像は日本帝國主義の象徴のように展示されようとしたのであるが、江口は台湾原住民への肯定的な見解に基づき、それまでの原住民に対す

る「野蛮」、「未開」のイメージを、野球競技を通して改めるという目的が語られたと解されるのである。

3-5. 「能高団」結成とその影響

3-5-1. 原住民社会への影響

1923年9月、アミ族少年からなる「能高団」が結成された。これが原住民社会にどんな影響を与えたかについて以下に考察する。

1922年、花蓮体協が成立すると、江口会長は積極的に野球を奨励した。それによって毎年春秋2回の野球争覇戦を行い、内地人、漢民族が野球に積極的に参加した。その際に原住民もつねにこの野球を観戦した⁵⁷。すなわち、野球場が日本人、漢民族、原住民の共通空間としての役割を果たし始めたのである。そして、原住民は「野球を見る」から、「野球をする」へと転換していく。「能高団」が編成された後に、部落の原住民の子どもや附近の蕃人公学校の原住民在校生に、以下の新聞報道にみるように、ある種の変化が起っていた。「従来の如く弓矢を手にして遊戯すること尠く為に彼等傳統的特有の凶暴性を矯正し共同一致の眞精神を體得させる効果甚大なものと認められ蕃人も野球は従来内地人本島人（漢民族：筆者注）のみにて行はれて居たのに蕃人チームが出来一般蕃人子弟も内地人本島人と伍して競技するを見て恰も地位が向上した如く思ひ⁵⁸」、「江口廳長の奨励と農



図2. 原住民子どもは野球を楽しむ
(1924年9月28日『台湾日日新報』より転載)

業學校チームの擡頭に依り州下の蕃社に於ける蕃童は親の仕事の手傳を他所に何れも野球をやる様になった。野球は蕃人指導教化には至大の効果を齎した⁵⁹。また図2は、原住民の親子が伝統の衣裳を着て、こどもの方が近代スポーツである野球のグローブを持ち共に大笑いしている状況を描いている。

このことから、江口が図った野球による原住民教化の成果は確かに顕われつつあったといえる。すなわち、伝統的に野蛮な性格を持つとされた原住民が、近代スポーツである野球との出会いによって、文明化しているとのイメージが新聞によって発信されたのである。

3-5-2. 「能高団」対大毎野球団の試合

1922年2月、台湾体育協会の招聘で大毎野球団（以下・大毎）が初めて台湾に遠征した。さらに1924年、台湾体育協会の招聘により、河野三通士監督が率いる一行が4月25日郵船三島丸で再び来台した。同月27日より、台北、花蓮港、高雄、台南、台中などの各地を転戦することとなった。そのような中で、東海岸の花蓮港への遠征中の30日に花蓮港軍⁶⁰との対戦が行われた。大毎は「能高団」との対戦を予定していなかったが、大毎主将日下は「大毎軍が花蓮港へ到着の日、滞在中是非一度指導的に試合をしてくれとの事で、吾々は此可憐な同胞チーム（能高団：筆者注）と一戦することを快諾した⁶¹」と述べている。これによって、5月1日に花岡岩グラウンドに於いて「能高団」と大毎の親善試合がおこなわれた。

この試合の前に、花蓮体協中村野球部長の案内で、大毎一行は蕃人部落タ克蘭社を見学した。大毎一行のタ克蘭社原住民との交流は次のように伝えられている⁶²。

「一行は原始的風物と蕃人踊とに興味を惹いた。殊に蕃人は一行を木蔭に導き蕃人料理を饗應し頭目カンラは一行に遠来の労を稿ふべく挨拶を為したに對し、河野團長が之に應へたなど感激に値する光景であった」。



写真6. 盛装したアミ族男女
(2008年『台湾の古き葉書』より転載)

その後、大毎は原住民との記念写真を撮ってから、花蓮港に引き返した。そして午後2時より「能高団」との試合を行った。試合中に、花蓮港総出という大盛況の中で原住民部落から盛装した(写真6)原住民男女百数十人が応援に駆けつけ、試合途中に大毎選手らは「能高団」を指導しながら対戦し、結果は大毎が22対4で圧勝したが、試合中の大毎に対する原住民の歓声は遠来の大毎軍を大いに悦ばせた⁶³。

試合後、「能高団」選手は各自のポジションにつき、大毎選手から指導を受けた。指導通りにやればそれらをこなす事ができることを知り、大毎選手は原住民の学習能力と運動能力の高さを理解したのである⁶⁴。

1920年代の原住民といえば、恐らく半裸体素足で凶暴なイメージが連想されるが、この親善試合後、大毎主将日下は「事實は規定のユニホームにスパイクの靴一見内地プレーヤーと何等の差がなく、皆公学校(蕃人公学校・筆者注)や農業補習学校の在校生及び卒業生で、正規の教育を受け、邦語は勿論流暢に話す事が出来る⁶⁵」と述べ、原住民への未開なイメージを払拭している。これは、スポーツ(野球)と日本語による原住民の文明化イメージと解すことができ、まさに江口の言う「彼等の教化程度を知らしめるには野球の如きものこそ一番手近な早道⁶⁶」であることを裏付けるもの

であった。

この親善試合にはさらにもう一つの意義が含まれている。「盛装した蕃人」が試合を応援したことである。原住民は盛装する機会を制限しており、祭礼や結婚式など部落の重要な活動にのみ盛装することができる。しかし今回は野球観戦なのに、原住民はそれを部落の重要な活動と見て、このような民族衣装で身体を飾っている。ここには彼らの野球に対する関心の深さとその重要視とを認めることができるのである。

4. 原住民宣伝、理解の旅

4-1. 台湾西部遠征

大毎野球団がもたらしたこの一連の変化、つまり野球による原住民の文明教化は、花蓮港についてのものであった。これを如何に多くの地に広めることができるかを江口は「規律ある運動、整然として勇氣ある動作それを相当立派に蕃人がやりこなすといふ事を蕃人のために天下に周知せしめたいのである⁶⁷」と考え始めていた。江口のこの想いは、1924年9月12日に修学旅行を兼ねた「能高団」が、オール花蓮港団と共に西部遠征するに及んで実を結んだ⁶⁸。

「能高団」の西部遠征にあたって、選手らは夏季休暇を利用して学生労働者として花宜(花蓮と宜蘭を意味する)道路工事に従事し、彼等は稼いだ賃金を西部遠征の旅費として支弁した⁶⁹。

「能高団」は主に花農の生徒によって編成されており、そのうちに2、3名の蕃人公学校の生徒が含まれてはいるものの、他はすべてアミ族であった。選手以外の生徒約60名も修学旅行を兼ねた応援団として同行した。そして坂本がこの遠征団を引率することとなった⁷⁰。

「能高団」西部遠征メンバー(写真7)の編成は以下の通りである。

団長：江口良三郎 監督：坂本茂、門馬経祐

主将：コモド

選手：オシン、サウマ、サンテヤオ、アラビツ、アミル、ロウサワイ、キサ、ロオドホ、ア

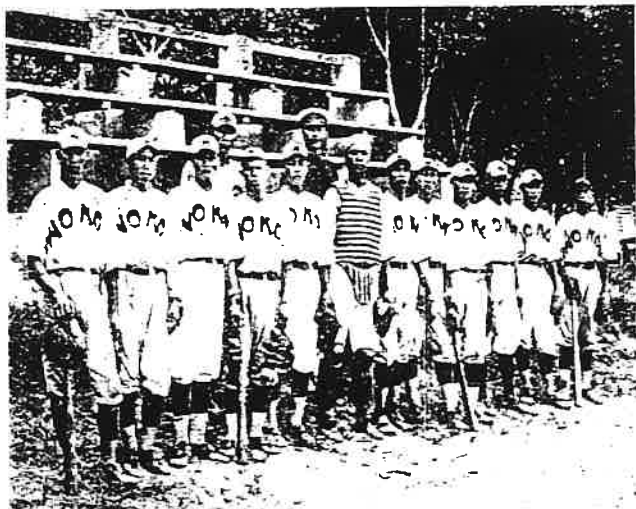


写真7. 能高団西部遠征のメンバー
(1924年9月18日『台湾日日新報』より転載)

セン、マヤオ、サラウ、カーサウ⁷¹

江口団長は西部遠征について「勝敗は眼中に無い⁷²」として、目的を大要次のように述べている。

「能高団」が結成されてから一年が経過し、ついに西部遠征のチャンスが到来した。1920年代の原住民といえば、まだ首狩りや人喰い人種と言った噂が誤伝され、連想されてしまう程度の認識であった。「この誤った宣傳を氷解する為にも、將た又教育指導の宜しきを得れば吾人の同胞として立派に能率を有して居る處の人種であるといふ事を知らしむる上に於ても、一二年内には是非共内地遠征の勇躍を試みたいと大に力気味で居る⁷³」(下線・筆者)。即ち野球や教育指導の成果が表われれば、「吾人の同胞として」公正なる評価が可能となる。このような考えに基づいて一ヶ月前から猛練習を重ねてきたため、チームの調子も良くなってきてはいるものの、いくつ勝利を得る事ができるかは、興味深い話である。「能高団として所謂アミ族野球團として如何なる對手に對しても蕃人本来の勇猛心を發揮し最も男性的に最も勇敢にやれと教へてある⁷⁴」。

1924年9月19日、「能高団」とオール花蓮港団は長春丸に乗船し、西部遠征に向かった。岸壁には官民多数が並び原住民保護者等と共に彼らを見送った⁷⁵。船は9月20日、基隆港に着岸。「能高団」選手らは霜降の学生服にカーキ色の巻ゲートル、地下足袋といった服装で雑囊を肩にして、

花農校旗を掲げ、午後台北駅に着いた。こうした格好に対し「蕃人とは誰しも思へない位である⁷⁶」また「文明人に劣らぬ筋骨逞しい少年團⁷⁷」と新聞報道がなされた。

その後、台湾体育協会の音羽理事から「能高団」とオール花蓮港団へ歓迎の挨拶があり、その後、「能高団」は松浪館へ、オール花蓮港団は萬屋旅館に入り宿泊した⁷⁸。

4-2. 西部遠征の経緯

「能高団」の西部遠征では台北、台中、台南、高雄、屏東、新竹、基隆などの各地で日本人チームと対戦することとなっていた。まず、1924年9月21日に台湾体育協会野球部主催のもとに台北の強豪チームと対戦した。

「能高団」の初戦は圓山グラウンドにおける台北商業⁷⁹との対戦であった。台北商業は、1924年の甲子園に台湾代表として出場した強豪校である。強豪校対原住民の対戦は「珍客能高團を迎えて」と新聞報道され、野球ファン約七千人(写真8)で球場は脹れあがった⁸⁰。

試合前の練習を新聞は「勿論選手同士の會話も内地語(著者注:日本語)或は英語を用ゐる行を共にした農業学校生徒(同ジアミ族)の應援歌の内地語であったことは觀衆の誰しも嬉しかった⁸¹」と報道し、さらに、試合が始まると、図3のよう



写真8. 能高団VS台北商業
1924年9月22日『台湾日日新報』より転載



図3. 能高団選手はベンチから声援の様子
(1924年9月23日『台湾日日新報』より転載)

に「試合の緊張するにつれ熱狂し蕃語を用ゐるのも却つて可愛ゆく聞こえた⁸²」と「能高団」のベンチの応援の様子を報じている。

初回の表に「能高団」の主将コモドが中右間のフェンスを越えるホームランで2点をリードするが、結局、「能高団」は9対5で台北商業に敗れたにもかかわらず、場内では大きな声援を受けた。翌日9月22日の台湾日日新報は、この対戦に多くの紙面をさいている。

9月22日の総督府團との対戦（観客約三千人）⁸³は14対7で再敗し、9月23日、台北の一流選手を集めた大正プロ團との対戦（観客約五千人）⁸⁴でも8対2で敗れた。その後、漸次南下して、屏東からは逆に引き返しながら対戦していった。遠征は5勝5敗の成績に終わったが、結成一年にもかかわらず、こうした内容を得る事ができた事は高く評価すべきとして「蓋しこの結果は理蕃上何等か益すべきを疑はぬ⁸⁵」と評価された。さらに、「能高団」は対戦するたびに、成績があがってきた事が得点表からうかがえる。

西部遠征の成績⁸⁶

9/21 能高団 (敗) 5 - 9 台北商業 (於台北)

- 9/22 能高団 (敗) 7 - 14 総督府 (於台北)
- 9/23 能高団 (敗) 2 - 8 大正プロ (於台北)
- 9/24 能高団 (勝) 10 - 3 全台中 (於台中)
- 9/25 能高団 (敗) 1 - 16 全鹽糖 (於台南)
- 9/26 能高団 (敗) 5 - 6 中學團 (於台南)
- 9/27 能高団 (勝) 4 - 3 高雄混合團 (於高雄)
- 9/28 能高団 (勝) 2 - 0 屏東團 (於屏東)
- 9/30 能高団 (勝) 7 - 1 新竹團 (於新竹)
- 10/2 能高団 (勝) 6 - 3 全基隆 (於基隆)

4-3. 西部遠征の成果

以上のような「能高団」の西部遠征を通じて、原住民に対するイメージが如何に変化したのか、次に考察したい。

原住民は、山野で生業や防衛のために蕃刀を佩び、銃を手にするため、彼らを獍猛と評するのは無理のないことであろう。反面、そうした山野で鍛えられた身体は、野球では「外人を見る様である⁸⁷」、「強肩⁸⁸」、「快走⁸⁹」、「鮮かなスイング⁹⁰」、「勇敢の事、真純な精神、球の速い事⁹¹」、「蕃人は野球ばかりではなく短距離、長距離、ヂャンプ、投擲等段々内地人を壓していく現況です。私は臺灣の蕃人から近い将来日本を代表する運動選手が出る事と信じます⁹²」と賞賛された。加えてアミ族特有の文化である年齢組織は強い団結力⁹³を育み、それを新聞は「彼らの性格が最もよく著れてゐたのは主將に絶対に服従な事⁹⁴」と報じた。また「純白なユニホームを装うバットを手にし堂々内地人チームと雌雄を争ふに至った⁹⁵」、「彼等の特性とする投球能力の発達と、真純な精神より来る野球技に対する愉快と熱心とが相待て、あれまでに漕ぎつけたものと信ずるのだ。即ち真のスポーツマンの精神を彼等は最も発揮してゐる⁹⁶」と評価されている。

ここで、「能高団」は日本人と同じ競技、同じ服装、同じ場所、同じ言葉を用いて、日本人と戦う事で、その社会的なステイタスとそれに伴うイメージを高めていったといえる。

江口は「能高団」結成の目的の一つを「彼等が傳統的に持つて生まれた凶暴性の血を矯めると共

に他面スポーツの真精神を彼等に體得せしめ⁹⁷る事になると述べていたが、それがメディアによって喧伝されたことになったのである。

「能高団」の西部遠征によって「能高団」の選手たちは、自己の身体が野球技に適していることを示しただけではなく、それが文明化へのイメージにも繋がっていることを衆人に知らしめたのである。

1923年9月から「能高団」を主導してきた江口は、今回の西部遠征について大要次のように述べている。

「能高団」の西部遠征は非常な成功であった。チームには賛辞と同情が寄せられた。また選手たちの純真なプレー振りが十分に認められたことに感謝したい。彼等は先天的に強健な身体を持っていたが、故障もなく、大きな怪我でも包帯しただけで済んだ。これは内地人でもまねのできないことである。

今回の遠征では、実に収穫が多く、例えば、知事や部長などと一緒に食事をしたり、時に握手を求められることもあったが、これらのことは、ある意味で原住民の精神向上に好結果をもたらした。また、至る所で誠意ある好意を受けたことは、原住民が正しく理解されたことを示している。これらは全て予想以上の成功であり、西部の人々に感謝したい⁹⁸。

「能高団」西部遠征後の新聞紙面には原住民に

昔は蕃人
今は文化人にして
決して心かしくらぬ
アミ人の宣傳隊を内地に送る

図4. 1925年3月30日『台湾日日新報』より転載

対する記事の変化が見られる。1925年3月30日の台湾日日新報は「昔は蕃人 今は文化人」⁹⁹（図4）と「能高団」を大きな見出しで報道している。

総督府色の濃い台湾日日新報が初めて「能高団」に対してポジティブな報道をしたわけだが、これは、1923年9月にチームが結成されて1年半後にもかかわらず、台湾最大の発行部数を誇る台湾日日新聞が「能高団」のみならず、原住民をも賞賛したのであった。これは原住民の精神の向上を認めたもので、野球による理蕃政策の成果が明確に姿をあらわしたことを物語るものと言えるだろう。

5. 「能高団」の内地観光

5-1. 内地観光の目的

総督府は長らく台湾の理蕃事業の成果を如何にして内地に広く宣伝するかという課題を持っていたが、それは「蕃人と言へば首キリを連想する内地に對し本島理蕃育英事業の発達を内地にも広く宣傳したい¹⁰⁰」の言にも明らかである。

こうした状況の中、江口によって編成された「能高団」に対し「能高団が蕃人チームで將來有望視されて居る事は先様御承知の通り¹⁰¹」の新聞報道も影響して、最終的には江口と中田理蕃課長の交渉を経て、総督府から「能高団」の内地観光が許可される運びとなった。総督府でも「大いに今から期待されて居る¹⁰²」と「能高団」の内地観光による台湾の理蕃事業の成果アピールが期待された。

さて、いよいよ内地への遠征を準備するにあたって、江口は内地観光の本来の目的を明らかにしている。それによると、「能高団」の内地観光は単に野球団としての遠征ではなかった。出来る限り原住民自身が宣伝隊を組織し、内地人に「蕃人も皇化の恵み教育の力は彼等をして斯くの如き文化人たらしめたといふところを見せるべく野球部の遠征を更に擴大し宣傳隊を野球部講演部音楽部舞踊部活動寫真部といった風に分ち野球部では麗の純真且つ勇敢なところで野球試合をやる¹⁰³」

と述べている。

1923年9月、江口は「能高団」結成に際し「内地観光」と「蕃人宣伝」の実施を明言していた。1925年7月3日、「能高団」の内地観光が決定する。江口は「能高團の遠征に依つて曲解されて来た蕃人の真相を内地の人々に知らせ延いては内地観光に依り彼等蕃人の進歩発展を促す事が出来れば此の上ない意義ある企てと思ふ¹⁰⁴」と明確に内地観光の目的を述べている。

従来 of 理蕃観光においては、団体として内地に観光したことは決して少なくなかったが、しかし原住民の伝統衣装を着ていたため、内地に観光するというよりも「観光される立場にあった」と言つてよい(写真1を参照)。今回の内地遠征は、以前の理蕃観光と違って、彼等が蕃人公学校を卒業し、花農に進学していることから「現に文明國の学問教養を受けつゝある学生團として赴くもので、従つて同校の制服制帽を著けて自由に内地語を操る一の文化團の資格に於て、暑中休暇利用の見学旅行を為すのである。¹⁰⁵」と新聞報道されたように、日本の教育を受け、日本語を自由に話せる文化人学生としての渡日と見なされていたのである。

上述したように、「能高団」の内地遠征は野球のみならず、「辯論に音楽に至る處彼等を通じて直接臺灣文化の宣傳を行ふ¹⁰⁶」べく、広く原住民文化の内面を内地人に正しく認識させ、そこから原住民理解を深めるべく宣伝するために、講演、音楽の練習が行われたのであった。

1925年6月24日、内地遠征の激励をかねて「能高団」選手による講演会が開催された。演題および演題者は以下のようである¹⁰⁷。

- 一、開會の辭：浦田大朝記者
- 二、私共の生活：キサ君
- 三、蕃人：ブノスラ君
- 四、ハモニカ獨奏：キサ君
- 五、感涙：ローサワイ
- 六、私共ノ野球：コモド主将
- 七、蕃歌獨唱：ローサイル君
- 八、挨拶：坂本監督

内地遠征の15名のメンバー構成は次のようであった。コモド主将(21歳、溪口社)、オシン(22歳、溪口社)、サンテヤオ(22歳、下勝灣社)、アシン(17歳、下勝灣社)、アセンハリヤン(17歳、下勝灣社)、アラビツ(18歳、下勝灣社)、キサ(18歳、安通社)、ロオサワイ(18歳、馬太鞍社)、ロオドホ(17歳、馬太鞍社)、タツイ(17歳、太巴望社)、トイル(17歳、太巴望社)、サラウ(18歳、太巴望社)、ブノ(18歳、拔子社)、サラウ(20歳、砂丁武社)、カサウ(21歳、北埔社)¹⁰⁸

5-2. 内地観光の経緯

1925年7月3日、「能高団」一行は遠征に先立って、総督府桂警部、花農の坂本、門馬の引率で総督府の坂本警務局長を訪ね挨拶をした。局長は「氣候風土の異なる内地に行つては殊に身體を大切にし所期の目的を達する様努めまたこの機會に充分な觀察見學をなし歸臺後蕃社の開発に努める様に」¹⁰⁹と訓示した。その後、基隆港で理蕃関係者多数の見送りを受け、選手らは鼠色の制服に白線二条の制帽の姿で笠戸丸に乗船し、内地観光をかねての野球試合を目的¹¹⁰として内地へと旅立った¹¹¹。

引率の三氏は「多くの期待は持たないが蕃人には蕃人の長所もある一行は始めて内地を見る喜びと共に内地野球グラウンドの大なるを豫想して居るらしい」¹¹²と述べている。



写真9. 文化青年の能高団
(1925年7月8日『大阪毎日新聞』より転載)

7月7日、「能高団」は神戸に到着した(写真9)。写真9で見るように「能高団」一行は外見からは、原住民とは見えなくなっている。この様子を当時の日本の新聞は「文化青年¹¹³」とか「學生姿で内地の中學生とさして變るところもない¹¹⁴」などと報道している。これは、1925年3月30日の台湾日日新報で「昔は蕃人 今は文化人」と報道されたものと同様の趣旨である。1925年7月4日に大阪朝日新聞は「蕃人中の新人として人格もあり修養もある若い人達である¹¹⁵」と「能高団」について報道していた。「能高団」は日本に来る前に既に好意的な記事で報道されていたのである。そして、神戸港着の際には、原住民の固有文化性(原住民アイデンティティー)は新聞報道上では捨象され、表象されているのは日本人的アイデンティティーであったといえよう。

「能高団」は神戸に到着後、3週間近くの内地観光や遠征を展開するのであるが、到着翌日の午前、皇大神宮、古館、倭姫神社を見学し、如雪園で昼食をとった。主将コモドは同地の二百名の小学校5、6年生と新聞記者に対し「蕃人¹¹⁶」という演題で講演¹¹⁷を行った。

7月9日、「能高団」は東京に到着(写真10)。写真10と写真1との表象される意味合いを吟味してみたい。写真1は、1912年、原住民の内地観光を実写したものである。当時の原住民は伝統的な衣装を着て、それを見た内地人は台湾からの原住民をもの珍しさから興味津々たる気持ちから

たくさんの人群が集まった。しかし写真10では、「能高団」一行は外見からは内地人学生と変わらない学生制服に身をつつみ、かつてのように内地人に囲まれることもなく、悠々と東京駅から出ている。このように二枚の写真は、新旧の台湾原住民を対照的に映し出しているが、それを文明化と見るか、皇民化と見るかは別としても、こうした変化をこれほどの短い期間で見せたことは注目に値する。

7月11日、「能高団」の内地での初戦相手は早稲田中学であった(写真11)。試合は立教大学の運動場で開催されたが、この試合はもともと予定に入っていなかったものである。そこで急遽試合を行ったのであるが、突然の試合であったため、観戦者もなく、主催者の東京府庁から5、6人、台湾関係者では元総督府の土木課長高橋辰次郎、生駒文教課長と二百名程度の観客が集まったのみであった¹¹⁸。試合の結果は6対6で引き分けだったが、試合中に観客から「何れも蕃人側に聲援するのもおもしろい¹¹⁹」として「臺灣負けるな¹²⁰」と「能高団」に熱狂的な歓声が送られた。早稲田中学校は1925年に第11回の夏の甲子園で準優勝を果たしており、「能高団」の実力が早稲田中学校に比肩するものであったことがわかる。試合終了後、立教大学に於いて茶話会が催され、主将コモドは「自分ノ野球團¹²¹」という演題で講演を行った。

その後、「能高団」は横浜、名古屋、京都、大阪、



写真10. 東京駅に到着した能高団一行
(1925年7月10日『東京朝日新聞』より転載)



写真11. 能高団VS早稲田中学校
(1925年7月20日『讀賣新聞』より転載)

神戸、広島などの各地を観光をしながら試合を行っている。

内地遠征の成績は次のようであった¹²²。

- 7/11 能高団 (引分) 6-6 早稲田中学 (於東京)
- 7/14 能高団 (勝) 5-4 神奈川一中 (於横浜)
- 7/16 能高団 (敗) 4-2 愛知一中 (於名古屋)
- 7/18 能高団 (勝) 13-3 京都府立師範 (於京都)
- 7/20 能高団 (敗) 3-13 八尾中学 (大阪)
- 7/21 能高団 (勝) 7-2 天王子 (大阪)
- 7/23 能高団 (敗) 3-25 神港商業 (神戸)
- 7/25 能高団 (敗) 2-3 広陵中学 (広島)

以上が内地遠征の成績であるが、これ以外に「能高団」が内地人と接触した内容は次の通りである。

1925年7月13日、「能高団」は塩水港製糖の招待で丸ビルの精養軒で晚餐会に招待された。貴衆両院議員を始め、楨社長、社員など約二百名が参集した¹²³。楨社長は「蕃人教化の進歩を歎賞し¹²⁴」と述べている。選手らは洋食を舌鼓を打ったが、この洋食を食べる様子は湯川によれば「招宴では洋食のナイフ、フォークの鮮かな使ひ振りに列席の人々を驚かしたとの事である¹²⁵」。

最後にキサ選手は流暢な日本語で「我等の学校¹²⁶」なる演題で講演を行い、また、ハーモニカを演奏した。さらに、ロオサワイ選手は原住民の歌を歌い、会場では選手と内地人とが一緒に、お互いに理解しあつて、和氣藹々とした中散会した¹²⁷。

「能高団」は各地の試合に際して、その都度宴会に招かれたが、選手は積極的に講演に登壇し、その堂々たる講演振りは主催者を驚かせるほどであった¹²⁸。さらに、彼らは余興として原住民部落の活動写真やハーモニカの実演などを披露した¹²⁹。また、宿泊先では他人に迷惑を掛けないよう静肅にし、その規律正しさは賞賛に値するものであった¹³⁰。以上は新聞報道にみる「能高団」の評価であった。このようにして内地観光の最終日を迎えた7月27日、「能高団」は八幡製鉄所を見学し、午後に門司に引き返し、予定されるすべて

の観光と試合を終了し、笠戸丸で台湾に帰った。

5-3 内地観光の成果

「能高団」の内地観光の目的は、内地人に対する原住民理解の改善にあつた。試合の結果は一引き分け、三勝四敗に終わったが、野球試合はこの目的の一つ機能にすぎなかつた。

江口は今回の内地観光の成果について次のように述べている¹³¹。

「野球技に於てのみならず、講演に音楽に、内地の人々をして、これでも真の蕃人かと疑はしめる程、最も有効に蕃人自身を以て、臺灣蕃族を宣傳し、併せて野球技を思ふ存分に練磨して来た。アミ族蕃人、否、臺灣全蕃族の為め萬丈の氣を吐き蕃人にして尚且つ欺くの如しを誇示し、その宣傳に、その征戰に一大成功を収めたるアミ族能高團は欺くの如くにして天下の名を馳せた。選手等は至る所に於て徹頭徹尾謙遜であつた。そして常に勇敢であつた。彼等は西部遠征に於ても、内地遠征に於ても、總てに於て完全に成功した」。

「能高団」内地観光の立案者であつた江口は、今回の観光が所期の目的どおりに進行したと評しているが、他の人達やメディアはどう見ていたか。

1925年8月25日の台湾日日新報は今回の「能高団」の内地観光について「能高団の宣傳でない。花蓮港の宣傳でない臺灣十三萬蕃族のための宣傳である臺灣の宣傳である今やその目的は見事に成功した¹³²」と報じている。また、台湾総督府警務局編纂の『理蕃誌稿』(理蕃事業報告書)では、以下のように述べられている¹³³。

「觀光ニ因ル生徒等ノ啓發ハ勿論ナルモ國語ノ講演ト野球試合ニ依リテ内地人ニ臺灣蕃族ヲ理解セシメタルモノ頗ル大ナリシヲ思ハレタリ」

こうした事例を総合するなら、江口の「蕃人に對する一般的野蠻觀が直ちに臺灣を實際以上の非文明なものにして」いるとの認識を背景に企てられた「能高団」内地観光は、ありのままの「蕃人」でなく日本化された「蕃人」による、いわば演出された文明パフォーマンスによって一定の成果を挙げたといつてよいであろう。

6. おわりに

日本統治下において野蛮・未開を表象する側に立たされた原住民は、「能高団」という特殊な文明化集団の西部遠征と内地観光によって、その見直しが画策された。その企ては原住民のイメージ改善に一定の成果をもたらしたが、本研究の目的である野球を通しての理蕃政策の展開については以下のようにまとめることができよう。

1. 長らく理蕃政策に係わってきた江口は「蕃人」に野球を行わせることで「蕃人」に対するマイナスイメージをプラスイメージに転換することをもくろんでいた。
2. 「能高団」は台湾と本土の日本人と野球を行うことで、観る者に原住民が文明化されている印象を与えるのに成功した。
3. その成功は中等教育によって日本人化した「能高団」という特殊な集団によってなされたものであるが、野球がそのことに対し（そこに展開される礼儀正しいや謙遜といった日本人的行動様式をも含めて）大きな役割を果たしたことは認められてよい。

【注及び引用・参考文献】

- ¹ 日本順益台湾原住民研究会 (1997) 「台湾原住民—その過去と現在」 『台湾原住民研究への招待』 風響社, p. 15.
- ² 台湾総督府 (1997 復刻版/1945) 『台湾統治概要』 南天書局, p. 86.
- ³ 霧社事件 (1930 年) 以前の理蕃観光は、第 1 回 (1897 年 8 月 3 日 - 8 月 31 日)、第 2 回 (1911 年 4 月 1 日 - 4 月 21 日)、第 3 回 (1911 年 8 月 15 日 - 9 月 23 日)、第 4 回 (1912 年 4 月 30 日 - 5 月 27 日)、第 5 回 (1912 年 10 月 1 日 - 10 月 31 日)、第 6 回 (1918 年 4 月 19 日 - 5 月 31 日)、第 7 回能高団内地観光を兼ねて遠征 (1925 年 7 月 3 日 - 7 月 30 日)、第 8 回 (1928 年 4 月)、第 9 回 (1929 年 4 月) と実施された。鄭政誠 (2005) 『日治時期臺灣原住民的觀光旅行』 博揚文化, p. 55-56.
- ⁴ 鄭政誠 (2005) 『日治時期臺灣原住民的觀光旅行』 博揚文化.
- ⁵ 1897 年、台湾総督府は早くも第一回の原住民内地観光を企画した。観光に参加したのはタイヤル族、ブヌン族、ツォウ族、パイワン族の合計 13 人が選ばれた。山路勝彦 (2008) 『近代日本の植民地博覧会』 風響社, p. 60.
- ⁶ 伊藤真実子 (2008) 『明治日本と万国博覧会』 吉川弘文館, p. 1.
- ⁷ 林素珍 (2003) 『日治後期的理蕃—傀儡與愚民的教化政策 (1930 - 1945)』 國立成功大學・史研究所博士論文.
- ⁸ 藤井志津枝 (1986) 『日據前期臺灣總督府的理蕃政策』 國立臺灣師範大學・史研究所博士論文.
- ⁹ 藤井志津枝 (1989) 『日據時期臺灣總督府的理蕃政策 (1895 - 1915)』 國立臺灣師範大學・史研究所出版.
- ¹⁰ 藤井志津枝 (1997) 『理蕃』 文英堂出版社.
- ¹¹ 藤井志津枝 (2001) 『臺灣原住民史政策篇 (三)』 臺灣省文獻委員會出版.
- ¹² 蔡宗信 (1992) 『日據時代台灣棒球運動發展過程之研究—以 1895 (明治 28) 年至 1926 (大正 15 年) 為中心』 國立臺灣師範大學體育研究所碩士論文.
- ¹³ 謝佳芬 (2005) 『台灣棒球運動之研究 (1920-1945)』 中央大學・史研究所碩士論文.
- ¹⁴ 湯川充雄 (1932) 『台湾野球史』 台湾日日新報。湯川は、1910 年臺北武・會廣場で中學會主催の臺北大会に選手として出場した。1914 年、臺灣総督府土木局に奉職し、土木局野球部の一員となった。1915 年北部野球協會が設立された際に理事に就任し、台湾野球界との関係が深くなり、そして、1920 年臺灣體育協會を組織する際に、野球部の幹事を務めた。林勝龍「嘉農精神の創造—日本統治下台湾における嘉義農林学校野球部のアイデンティティ—」 『スポーツ人類学研究』 第 12 号掲載予定.
- ¹⁵ 1923 年、東台湾研究会による『東台湾研究』が創刊された。この書物は主に東部 (台東・花蓮) の開発、理蕃などについて書かれているものであり、これにより「化外の地」と呼ばれている東部では、東部に関する情報を「外

- へ発信する機能を果たしていったと考えられる。
- 16 宮本延人 (1985) 『台湾の原住民族—回想・私の民族学調査』六興出版, p. 155.
- 17 坂野 徹 (2005) 「日本人類学の誕生」『帝國日本と人類学者 1884 - 1952』勁草書房, p. 15.
- 18 鳥居龍蔵 (1976) 「人類学研究・台湾の原住民 (一) 序論」『鳥居龍蔵全集』第五卷, 朝日新聞社, p. 4
- 19 植民地初期, 台湾原住民研究のため, 日本からの人類学者伊能嘉矩, 森丑之助らが台湾にやってきた。
- 20 片桐真澄 (2003) 「台湾原住民諸語を巡る諸問題と言語的共生への方策」『文化共生学研究』第 1 号, p. 94.
- 21 坂野 徹 (2005) 前掲書, 勁草書房, p. 230.
- 22 坂上康博 (2001) 『につぼん野球の系譜学』青弓社, p. 15.
- 23 林勝龍, 前掲書.
- 24 謝佳芬 (2005) 前掲書, p. 58.
- 25 同上.
- 26 サウマは花蓮港庁下の秀姑巒溪にある舞鶴社のアミ族であり, 1922 年花蓮港公学校を卒業後, 玉里駅に勤務, 1923 年 9 月, 花蓮港農業補習学校に進学した。
- 27 湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 243
- 28 緋蒼生 (1925) 「蕃人チーム能高團」『東臺灣へ』第十七編, 東臺灣研究会, pp. 8-9.
- 29 同上, p. 8.
- 30 1929 年, 「蕃社戸口」の調査によると, 「タイヤル族 33,677 人, サイシャット族 1,280 人, ブヌン族 18,072 人, ツォウ族 2,103 人, ルカイ族 5,030 人, パイワン族 30,748 人, プユマ族 5,236 人, アミ族 42,028 人, ヤミ族 1,619 人, 合計 139,795 人」日本順益台湾原住民研究会 (1997) 前掲書, p. 10 より引く。
- 31 謝佳芬 (2005) 前掲書, p. 57.
- 32 小泉鉄によると「年齢別によって組織せられてゐる階級があつて其の上下の區別といふものは極めて嚴格であり, 上級のものゝ命令は下級のものにとつては殆ど絶對であつたのである」と指摘されている。小泉鉄 (1997 年復刻 / 1932 年) 『蕃郷風物記』南天書局, p. 14.
- 33 日本順益台湾原住民研究会 (1997) 前掲書, p. 109.
- 34 廖守臣, 李景崇 (1998) 『阿美族歴史』師大書苑, p. 219.
- 35 2010 年 9 月 2 日, 郭勇志へのインタビューより。郭勇志は 1977 年, 台東に生まれ, アミ族出身, 国立台湾体育学院野球部を経験し, 2001 年, 台湾のプロ野球ドラフト会議で第一順位 (投手) で興農ブルズに入団し, 2009 年に引退した。現在, 国立台湾体育学院野球部コーチを務める。
- 36 1909 年 10 月 25 日に総督府は第 8 回地方行政機構の改編において 12 庁 (宜蘭庁, 台北庁, 桃園庁, 新竹庁, 台中庁, 南投庁, 嘉義庁, 台南庁, 阿. 庁, 台東庁, 花蓮港庁, 澎湖庁) が定められ, 1920 年 9 月 1 日, 第九回の改変では, 12 庁から 5 州 2 庁 (台北州, 新竹州, 台中州, 台南州, 高雄州, 台東庁, 花蓮港庁) に変更された。
- 37 橋本白水 (1926) 「江口廳長の治績」『嗚呼江口廳長』第二十七編, 東臺灣研究会, p. 23.
- 38 川島生 (1920 年) 「訪問 警務局理蕃課長」『臺法会報』臺法会報, p. 24.
- 39 同上, p. 24.
- 40 同上, p. 24.
- 41 同上, p. 25.
- 42 同上, p. 25.
- 43 同上, pp. 25-27.
- 44 同上, p. 27.
- 45 同上, p. 27.
- 46 江口良三郎 (1917) 「蕃人に接遇と民蕃接觸取締方」『台湾警察協会雑誌』台湾警察協会, pp. 20-21.
- 47 1921 年 4 月, アミ族教育のために「花蓮港街立簡易農業学校」が設立され, 校長に坂本茂 (任期, 1921 - 1922) が就任した。修業年限は 4 年と定められた。1922 年 4 月, 「公立花蓮農業補習学校」に校名が変更された。平川吉雄 (任期, 1922 - 1931) が校長を務めた。
- 48 「能高團」という名称は, 「江口良三郎で能高の名稱は市街に近く聳える海拔一万七七百尺の高峰能高山の名からとつたのである」。湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 249.
- 49 「死球を頭に喰つても平気な蕃人選手」『台湾日日新報』1924 年 9 月 20 日.
- 50 「蕃人チーム能高野球團」『台湾日日新報』1925 年 8 月 25 日.
- 51 緋蒼生 (1925) 前掲書, pp. 12-13.
- 52 緋蒼生 (1925) 前掲書, pp. 11-12. 引用文中の江口の「野蛮觀」発言については, 他にも同様な言説を認めることが出来る。例えば小泉鉄は「臺灣といふと直ぐに『生蕃』を聯想する位, 臺灣と蕃人とは附き物になつてゐる」と述べている (小泉鉄 (1997 年復刻 / 1932) 前掲書, p. 32)。
- 53 日本は明治維新以後, 既に台湾を領有しようと考えた。1871 年, 琉球民 54 人は台湾南部のパイワン族による琉球漁民殺害事件以来, 日本でも広く知られていたが, 台湾原住民に対するイメージが未開民族と目され始めた。その後, 1895 年より台湾は日本の植民地となり, 1896 年に出版される『風俗畫報』に原住民の誠首風俗を大きく取り上げて陳述した。たとえば, 原住民の青年は娯楽として誠首をすることと, 結婚するときに, 男は誠首された頭を形見として用意するなどの記事によって, 日本人に台湾原住民が残虐で野蛮であるというイメージを植えた。
- 54 緋蒼生 (1925) 前掲書, pp. 11.
- 55 同上, pp. 10-11.
- 56 同上, p. 12.
- 57 「花蓮港の蕃人野球チーム能高團」『台湾日日新報』

- 1923年12月24日。
- 58 同上。
- 59 湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 243.
- 60 1924年4月30日と5月1日に、大毎は6対1, 4対0で、花蓮港軍に勝利をおさめた。黄成助 (1985年復刻版/1925) 「大毎野球團遠征」『臺灣年鑑』p. 403.
- 61 湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 249.
- 62 黄成助 (1985年復刻版/1925) 前掲書, p. 405.
- 63 同上, p. 405 / 湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 243.
- 64 湯川充雄 (1932) 前掲書, 台湾日日新報, p. 249.
- 65 同上, p. 249.
- 66 緋蒼生 (1925) 前掲書, pp. 11-12.
- 67 「勝敗は眼中に無い」『台湾日日新報』1924年9月18日。
- 68 「蕃人チーム能高團の遠征 オール花蓮港團と共に」『台湾日日新報』1924年9月16日。
- 69 「蕃人チーム能高團 近く西部遠征」『台湾日日新報』1924年8月2日。
- 70 「蕃人チーム能高團の遠征 オール花蓮港團と共に」『台湾日日新報』1924年9月16日。
「死球を頭に喰つても平気な蕃人選手」『台湾日日新報』1924年9月20日。
- 71 「蕃人及花蓮港野球團臺北試合日程決定」『台湾日日新報』1924年9月18日。
- 72 「勝敗は眼中に無い」『台湾日日新報』1924年9月18日。
- 73 年代不詳、警務局理蕃課三角生「全島的に名を成した蕃人野球チーム」『台湾警察協会雑誌』台湾警察協会 p. 115.
- 74 「勝敗は眼中に無い」『台湾日日新報』1924年9月18日。
- 75 「官民多数の見送りを受け」『台湾日日新報』1924年9月20日。
- 76 「能高團昨夕臺北着」『台湾日日新報』1924年9月21日。
- 77 「よろこび迎えへられた能高團」『台湾日日新報』1924年9月21日。
- 78 「能高團昨夕臺北着」『台湾日日新報』1924年9月21日。
- 79 1923年から始めて台湾の甲子園代表を「全国中等学校優勝野球大会」に出場した。その後、1924年、台北商業は台湾の甲子園代表として、第10回全国中等学校優勝大会に出場した。台北商業の初戦は金沢一中と対戦し、6対2で金沢一中に勝った。二戦目では、松本堅実と対戦した結果、2対7で敗北した。
- 80 「珍客能高團を迎へて」『台湾日日新報』1924年9月22日。
- 81 同上。
- 82 同上。
- 83 「遠征の能高團再び敗る」『台湾日日新報』1924年9月23日。
- 84 「大正プロ團對能高の試合に八點勝て喜ぶ」『台湾日日新報』1924年9月24日。
- 85 湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 263.
- 86 同上, pp. 254-262.
- 87 「珍客能高團を迎へて」『台湾日日新報』1924年9月22日。
- 88 「遠征の能高團再び敗る」『台湾日日新報』1924年9月23日。
- 89 同上。
- 90 同上。
- 91 湯川充雄 (1932) 前掲書, p. 264.
- 92 「能高團の遠征」『台湾日日新報』1924年9月28日。
- 93 同上。
- 94 同上。
- 95 同上。
- 96 湯川充雄 (1932) 前掲書, pp. 263-264.
- 97 緋蒼生 (1925) 前掲書, p. 11.
- 98 「蕃人野球チームとしての剛健と純真さは 永久に保存させ度いと江口花蓮港廳長は語る」『台湾日日新報』1924年10月18日。
- 99 1898年5月6日、台湾総督府の下に台湾日日新報を創刊される。1898年5月6日から1944年3月31日までに総計1万8790分が発行される。植民地下台湾における台湾日日新報の発行量は台湾の新聞の中で一位であった。許雪姬總策劃 (2004) 「台湾日日新報」『臺灣・史辭典』行政院文化建設委員會, p. 1082.
- 100 「愈々具體化した 能高團の内地遠征」『台湾日日新報』1925年6月23日。
- 101 同上。
- 102 同上。
- 103 「昔は蕃人 今は文化人として」『台湾日日新報』1925年3月30日。
- 104 「能高團内地へ遠征」『台湾日日新報』1925年7月4日。
- 105 「能高團の内地観光」『台湾日日新報』1925年7月3日。
- 106 「蕃人講演会 能高團遠征豫習」『台湾日日新報』1925年6月24日。
- 107 同上。
- 108 「能高團内地へ遠征」『台湾日日新報』1925年7月4日。
- 109 同上。
- 110 1925年7月4日の東京朝日新聞の紙面においても、台湾からの能高團について紹介する。したがって、内地も能高團の内地観光や野球試合の目的で報道され始めた。「台湾人チーム東上す」『東京朝日新聞』1925年7月4日。
- 111 「能高團内地へ遠征」『台湾日日新報』1925年7月4日。
- 112 「始めて来る蕃人チーム」『讀賣新聞』1925年7月7日。
- 113 「眼の鋭い 蕃人チーム神戸着」『大阪毎日新聞』1925年7月8日。
- 114 「台湾野球團 昨日神戸入港」『東京朝日新聞』1925年7月8日。
- 115 「足が長くて 盜塁がうまい」『大阪毎日新聞』1925年7月4日。
- 116 台湾総督府警務局 (1989年復刻版/1938) 『理蕃誌稿』第四卷, 青史社, p. 915.
- 117 従来の理蕃観光は「威信誇示観光」と「啓発観光」という目的で実施した。これらの原住民は内地で見聞、体験したことを、原住民部落で講演することによって、内地 (情報源) から部落へ (情報聴取者) の情報伝達が

出来るシステムとなる。例えば、第2回理蕃観光(1911年4月1日-21日)に参加した原住民は、1911年5月19日から26日までに「各蕃社を巡回し内地観光の感想を演説しつゝあり各地何れもも附近各社の有力者を集めて聴取せしめ居れば効果を頗る大なるべとし」「蕃人の内地観光演説」『台湾日日新報』1911年5月25日。しかし、能高団の内地講演会では、原住民社会を内地人に理解して貰うために、展開されたものと見られる。

- ¹¹⁸ 「能高對早中 試合雜観」『台湾日日新報』1925年7月13日。
¹¹⁹ 「灣人野球團の戦前振ぶり」『東京日日新聞』1925年7月12日。
¹²⁰ 「能高對早中 試合雜観」『台湾日日新報』1925年7月13日。
¹²¹ 台湾總督府警務局(1989年復刻版/1938)前掲書, p.915.
¹²² 同上, pp.915-917.
¹²³ 「東京にて臺灣事情講演會開催」『台湾日日新報』1925

年7月16日。

- ¹²⁴ 「鹽糖招宴 能高團を精養軒に」『台湾日日新報』1925年7月15日。
¹²⁵ 湯川充雄(1932)前掲書, p.587.
¹²⁶ 「鹽糖招宴 能高團を精養軒に」『台湾日日新報』1925年7月15日。
¹²⁷ 同上。
¹²⁸ 湯川充雄(1932)前掲書, p.587.
¹²⁹ 「能高團主催の臺灣事情講演會」『台湾日日新報』1925年7月15日。
¹³⁰ 湯川充雄(1932)前掲書, p.587.
¹³¹ 緋蒼生(1925)前掲書, pp.15-16.
¹³² 「蕃人チーム能高野球團の生立ち」『台湾日日新報』1925年8月25日。
¹³³ 台湾總督府警務局(1989年復刻版/1938)前掲書, p.917.